

Title	文体とその数量的研究法について
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.155-p.168
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80976">https://hdl.handle.net/11094/80976</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 文体とその数量的研究法について

舟 阪 晃

## A Critical Examination of Some Quantative Approaches to Style

Akira Funasaka

This is a review study of some quantative and statistical approaches to style. Seven researches in the individual style, three in the mass style, and one in the particular language style are examined and compared through their aims, data, methods of analysis and results. Finally the writer's evaluation and comment are given.

The conclusions are:

- (1) Quantative approach must be replaced by statistical one, in which the result must be dependent on (i) the reliability of a sample against its population and (ii) the presence or absence of the statistical significance in the sample.
- (2) Across the three levels of style, individual, mass, and particular language, speaker's or writer's intent and/or his psychological situation must be taken into consideration.
- (3) Comparison of subjective factors with objective ones in style will lead to a promising stylistics in which objective factors can hopefully describe subjective impression of the data with verifiability.
- (4) The method of analysis must be more structural because the traditional method, mostly a word count, is unlikely to reveal structural aspects including structural complexity, which are, in many cases, responsible for stylistic impression.
- (5) Stylistic factors must be sorted out into less groups based on their correlation coefficient.

### 0. ま え が き

本稿の目的は、数量的・統計的言語処理が文体研究にどのような光をあてるかということを考察することである。具体的な研究のいくつかを概観し、その長所・短所を検討し、将来の可能性を探ってみたい。対象は、英語で書かれたもので、数的な扱い方をしているものに限定し、主観的なものは対象外としている。数的な調査は、その扱い方がわかりにくく、また、扱い方も人により大きいちがいがあり、比較が困難であるので、本稿では、目的、資料、方法、結果という四

つの観点から考察し、最後に、論評という見出しで私見をのべることにした。

## 1. 前 提

### 1.1. 言語研究の数量的処理について

人間の行動の一部としての言語は、一定のパタンの現われとして理解されることが多い。表面的には、多種多様な、また、変化に富んだものでも、その背後にあるパタンは予想外に簡単な姿をしていることがある。言語のこのような面の理解のためには、経験的事実の収集と分析が、すくなくとも最初の段階で、不可欠である。単純に「パタン」といったときには、不連続で有限のもの、つまり、yes-or-no や same-or-different という概念で明確に割切った答が出せるもの、を考えがちであるが、行動の一部として言語の中に含まれるパタンは不連続なものである。つまり、ゼロか1ではなく、ゼロと1ばかりでなく、その両者の中間にくる無限の連続をも含むものである。

このような現象に対する数量的・統計的な分析法はいぜんから行われてきたのであるが、これに対する生成変形文法家からの反論は、Chomsky (1957 : 16-17) が最初のものであろう。Chomsky (1957) とそれ以後の生成変形文法の流れを踏まえて補足的にのべるなら、つぎのようにいえるであろう。人間の発話は、一つ一つが新しいものであるから、それぞれの発話の出現を統計的に処理しても、どの発話も同じ程度に小さい数値を示すだけである。したがって、統計的に有意味なものはないと考えられる。つまり、すくなくとも発話の段階では、「くり返し」は存在しないという考え方である。

これに対して、数量的・統計的方法論は、どのレベルかは別として、とにかく「くり返し」があるという前提にたっている。発話が、そのつど新しく、単なるくり返しはほとんどないというのは一つの事実ではあるが、すこし視点をえてみれば、同じもののくり返しが背後に認められる。生成変形文法は、年々その姿を変えているので言及するのが困難な面があるが、「無限の発話を説明する有限の規則体系」や「回帰 (recursive) 規則」という表現だけを見ても、「くり返し」という概念を無視することができないということがわかる。また、ごく初歩的に、類・個 (class-item) 階層においても、上位の類が下位の個を包含するということは、一種の「くり返し」操作と認めることもできる。

結論として、人間行動の一部としての言語の研究では、数量的・統計的方法論によって光が当てられるべき面があるように思える。しかし、ごく限られた数ではあるが、このような方法論による研究を検討したところでは、卒直なところ、隔靴搔痒の感がないわけではない。しかし、検証性 (verifiability) を求めるとすると、数量的・統計的処理が必要なのも事実である。

### 1.2. 文体研究の目的

文体についての数量的・統計的研究の文献を読んでいてしばしば感じるのは、この研究は何のためにしているのかということである。

たとえば、作者不詳の作品の作者を確定したり、疑わしい作者の真偽を判定するために文体（の一部）を調査することがある。この場合、作者や作品の全体像をあまり考慮しないで、ごく限られた特徴がよく出ると思われる要因のみについて調査を行うことが多い。いわば、臨床的に、判定しやすい症候群のみに注目しているといえる。このような文体研究は、その目的に限定して考えれば、それなりに有効なものかもしれないが、これが文体研究のすべてであるとはいえない。私見によれば、文体研究は、作者や、作品や、その言語の全体像等を明示的に示すものでなければならない。結果として、作者不詳の作品の作者が確定できることもあろうが、それは、すくなくとも、第一義的なことではない。

また、さまざまなレベルでの文体研究が可能であるが、レベルの混同がみられることがある。たとえば、ある詩人の韻文を分析し、それが韻文一般の特徴であるとしたり、また、二、三人の小説家の作品分析を行ない、その結果を「散文の文体」というふうに一般化している例もみられる。単に、ある文体を他の文体と区別することのみが目的であれば、これでもよいかもしれないが、それぞれのレベルでの文体の全体像を明らかにするという目的からいえば不満が残る。ほとんどの場合、統計的処理が適切に行われていないために、この種の問題が生じることが多い。

次章以降、各レベルの文体研究の具体例を検討することになるが、本稿では、個人文体、集合文体、特定言語の文体の三つのレベルでまとめている。

## 2. 個人文体

まず、個人文体の比較の実例を検討しよう。2.1. から2.4. までは個人間の文体の比較、2.5. から2.7. は、個人の内包する文体的特徴を調査している。

### 2.1. Williams (1969)<sup>1)</sup>

#### (1) 目的：

三人の作家の散文の特徴を比較する。

#### (2) 資料：

G. K. Chesterton, H. G. Wells, G. B. Shaw の社会学的な (sociological) 内容の散文、各600文。会話体は含んでいない。

#### (3) 方法：

文中に含まれる単語の数で文長を測る。

#### (4) 結果

##### (i) 一文中の単語数の平均値の大小：

Shaw > Chesterton > Wells

##### (ii) 標準偏差の大小：

Shaw > Wells > Chesterton

1) 出典については文献一覧を参照のこと。以下同じ。

Shaw は、一文中の単語数が他の二者よりも多く、比較的長文を用い、また、使用している単語の種類も多いことがわかる。Chesterton は、Wells の場合よりは長い文を用いることが多いが、単語の種類のパラッキが少ないので、同じ単語をより多く用いているといえる。

(5) 論 評：

(i) 三者の文体的特徴のうち、文長のみが調査されているが、これだけでは、三者の全体像のごく一部を扱ったにすぎない。

(ii) 一人の作家のいくつかの散文の間に生じるであろう変動幅が、三者のちがいより小さいといえるかどうか、統計的処理が必要となる。

(iii) (4)(i)と(ii)の結果と、三者の文体の主観的な印象とが照合される必要がある。

## 2.2. Kroeber (1969)

(1) 目 的：

四人の小説家の文体を比較する。

(2) 資 料：

Dickens, Brontë, Eliot, Austen, それぞれの四から七の作品。

(3) 方 法：

特定の語彙のグループの出現頻度を調べる。「体の部分を表わす名詞」、「体の動きを表わす動詞」、「抽象的名詞」、「精神的な活動を表わす動詞」、「記述的形容詞」などが調査項目とされている。

(4) 結 果：

(i) 全名詞数に対する「体の部分を表わす名詞」の割合(%)：

Dickens (15) }  
Brontë (14) } > Eliot (8) > Austen (3)

(ii) 全動詞数に対する「体の動きを表わす動詞」の割合：

Dickens (2.5) > Brontë (2.0) > Eliot (1.5) > Austen (0.6)

(iii) 「抽象的名詞」の出現頻度の大小：

Austen > Eliot > Dickens > Brontë

(iv) 「精神的な活動を表わす動詞」については、15の動詞が上げられ、四人の作家の作品中でのそれらの分布が記述されている。

(v) 「記述的形容詞」の出現頻度の総数の大小：

Austen > Dickens > Brontë > Eliot

(5) 論 評：

(i) 「体の部分を表わす名詞」と「体の動きを表わす動詞」とが、平行関係にあるのは当然であるが、「抽象的名詞」の頻度とは逆比例になっている点に注意すべきであろう。統計的に意味のある結論を出すためには、相関関係を明らかにする必要がある。

(ii) 調査項目の設定が恣意的である点は問題点の一つとなろう。調査者は、四人の作家の作

品のちがいが最もよく出ると思われる項目を選んだはずであるが、一般的な妥当性という観点からすれば疑問が残る。

(iii) (i)とも関連するが、全体的に統計的処理が不十分で、数量的差がある場合、それが統計的有意差を示しているかどうか検討しなければならない。

(iv) 五つの調査項目があるが、それぞれの処理のしかたが同じでない。たとえば、(4)(iv). 項目によって処理のしかたを変えた方がよいこともあるが、ここでは、その必然性が認められない。

### 2.3. Hayes (1969)

(1) 目的：

二人の作家の散文の特徴を比較する。

(2) 資料：

E. Gibbon と E. Hemingway の文章

(3) 方法：

R. B. Lees (1960) のモデルを踏まえて、主に、構造の出現頻度を記述する。

(4) 結果：

約68の項目を設定し、両者における出現頻度のちがいを記述している。下表は、両者の間で有意差を示した項目である。

	Significance in Standard Errors
Passive Transformation	9.48
Doublet	9.0
Infinitival Nominal	8.9
Relative-clause transformation	7.0
S having undergone transformation	6.5
% of S having embedded structures	6.3
% of S having doublet expansions	6.0
S which are additive	5.1
% of S having Nominalizations	4.0
Gerundive Nominal	2.8
VP expansion	2.6
S having 3 conjoined S	2.5
Adverbial Clause	2.0

(Hayes 1969 : 89)

一方、有意差を示さなかった項目としては、Prepositional Phrase Expansion, Factive Nominal などがあげられる。

(5) 論評：

(i) Gibbon の文体は、印象的には、“complex, grand, majestic”，一方、Hemingway の方は、“simple, direct, linear” であるとし、このような主観的な特徴に、構造的な特徴がどのように対応しているかを調べようとしている。文体研究の一つの方法として、主観的印象と客観的要因とを対応させるのは、今後さらに発展させられるべきものと思われる。

(iii) 調査項目は、種々のレベルのものを含んではいるが、二者の文体的ちがいのみが区別できさえすればよいという態度ではなく、両者の全体像を明らかにしようとする姿勢がみられる。

(iii) 方法論は、Lees (1960) にもとづいているので、現在の時点では不満はあるが、構造的な面にも焦点をあわせている点は評価できる。文体調査というと、ややもすると、個々の単語を勘定するという方法を取りやすいが、その点、Hayes の方法論は、「構造的」で、原理的には、望ましいものといえよう。

(iv) 統計的な処理は、一応行われており、数値的な差が統計的に有意であるかどうかには言及されている。また、その結果として、前表のように、文体的特徴を区別するのに役に立つ項目、役立たない項目を分離することができる。

(v) (4) であげた項目が、他の作家や、同一作家の他の作品についても、同じような傾向を示すかどうか確認をしてみる必要がある。

(vi) 調査した項目を、相関係数を求めることにより、いくつかの大きなグループにまとめることが可能ではないかと思われるが、これは今後の問題といえよう。

## 2.4. Leech & Short (1981)

### (1) 目的：

三人の小説家の文体を比較する。

### (2) 資料：

Conrad, Lawrence, James の作品を、それぞれ一篇づつとりあげ、そのうちの約400語の長さの部分を対象とする。

### (3) 方法：

主観的な印象をもとに、全部で69の調査項目が設定されている。その項目は、つぎの4グループにまとめられる。(A) 語彙的な項目。品詞やその下位区分の出現頻度を調べる。(B) 文法的な項目。主に、節の種類別に出現頻度を調べる。その他に、時制、相なども含まれる。(C) cohesion など。(D) その他として、文の数や、文ごとの単語数などが勘定される。

### (4) 結果：

項目ごとに出現頻度が記述され、統計的に有意差のある項目には印がつけられている。項目のグループごとに、有意差を示している項目の数を調べてみるとつぎのようになる。

(A) : James (13) > Lawrence (5) > Conrad (0)

(B) : James (2)  
Lawrence (2) } > Conrad (1)

(C) : James (2) > { Lawrence (0)  
Conrad (0)

(D) : Conrad (1) > { Lawrence (0)  
James (0)

(A) のグループでは、James が13項目において、他の二者に対し有意差を示している。また、その他のグループにおいても、James が有意差を示すことが多い。つまり、James は、他の二者より、特異な文体特徴を示しているといえる。それに対して、Conrad は、最も特徴が少ないといえる。

(5) 論 評：

(i) 対象とする資料が400語づつというのは少ないという印象を与える。全資料に対する標本の量が妥当かどうか統計的に確認する必要がある。

(ii) 項目のグループ化は妥当であるが、(B) の文法的な項目では、構造の複雑さなどを扱っていないために、全体として、静的な (static) なものとなり、もの足りない。たとえば、Cook (1979 : 167) によれば、Hemingway の文章は次のような特徴をもつという。

(a) clause 数/sentence=3.18

(b) clause 数/main sentence=1.84

このように、同じ節を扱っても、文に対するものと、主文に対するものでは、大きな差が生じる。また、節が、*and*-conjoining を含む場合と、relativization を含む場合とでは、同じ一つの節を内包するとしても、その複雑性は大きくちがってくる。

以上の点から考えてみると、むしろ、前述の Hayes (1969) の方が、発表されたのははるかに以前のものであるが、方法論的に見るべきものをもっている。

(iii) (C) では cohesion が扱われているが、その内容が判然としない。着眼点としては興味をもたれるが、今後、研究が待たれるテーマである。

(iv) 同一人物の他の作品間の数値や、他の作家の作品との比較を行なう必要がある。

(v) 調査項目間の相関関係を留意すれば、前述の形式的なグループとはちがった、統計的に意味のあるグループ化が可能であると思われる。

## 2.5. Bennett (1969)

(1) 目 的：

一人の作家の性質のちがう二つの作品を選び、共通項があるかどうかを検討する。

(2) 資 料：

Shakespeare の *Julius Caesar* (JC) と *As You Like It* (AS) の全文。

(3) 方 法：

語彙のくりかえしを勘定し、Yule の特徴係数 ( $K$ ) を調べる。

$$K=10,000 \frac{S_2-S_1}{(S_1)^2}$$

$$\left[ \begin{array}{l} S_1=fxX : S_2=fxX^2 \\ X=\text{くりかえし回数} : fx=\text{出現頻度} \end{array} \right]$$

(Bennett 1969 : 33)

(4) 結 果：



JC :  $K=49.2$

AS :  $K=40.5$

Bennett は、この結果から、“Shakespeare is very similar to himself.” (Bennett 1969: 36) と結論している。

(5) 論 評：

(i) 単語の選択は、個人的な癖が出やすい面ではあるが、同時に、テーマによる影響もうけやすいので、慎重な扱い方が必要とされる。

(ii) Yule の公式自体の妥当性もさることながら、両作品の  $K$  の値の差が統計的に有意差を示していないという言及がない。したがって、(4)の結論は説得力に欠ける。

(iii) (ii)とも関連するが、他の作品についても、また、他の作家の作品についても調査が必要である。

## 2.6. Landon (1969)

(1) 目 的：

一人の詩人の韻文中に現われるメタファを調べる。

(2) 資 料：

W. Owen の59篇の詩. 9,244語. 1,209行. 3,102の連語 (collocation) 中, 318のメタファ.

(3) 方 法：

メタファーを、具象化 (reification), アニメーション (animation), 擬人化 (personification) に、三区分し、それらが、文法上どういう位置に生起するかを調べる。文法上の位置としては、主語、目的語、名詞、修飾語の三つが区別される。

(4) 結 果：

メタファの タイプ	メ タ フ ァ		主 語		目 的 語		名詞修飾語	
	数	%	数	%	数	%	数	%
具 象 化	111	35	57	26	36	72	18	36
アニメーション	96	30	79	36	7	14	10	20
擬 人 化	111	35	82	38	7	14	22	44
合 計	318	100	218	100	50	100	50	100

(Landon 1969: 175)

上表によれば、主語の位置にメタファが出る場合が、他の場合より圧倒的に多い。

内訳として、具象化は、目的語の位置に多く、アニメーションは、主語の位置に、また、擬人化は名詞修飾語と主語の位置に、それぞれ、多いことがわかる。

(5) 論 評：

興味ある調査ではあるが、Landon 自身のべているごとく、この特徴は Owen のそれか、英語

の韻文が一般的にもっている特徴か、判然としない。さらに、多くの資料の分析と、統計的処理が必要と思われる。

## 2.7. Burwick (1969)

### (1) 目的：

一人の作家の複数の散文の特徴を調べる。

### (2) 資料：

Carlyle の六つの作品。各、10,000語。

### (3) 方法：

語彙レベルでは12の範疇、文型レベルでは8文型を区別。修辞法のレベルでは、大区分は5、小区分は35。

### (4) 結果：

文型の分布は、六つの資料を通じて、“relatively same”であるという。修辞法に関しては、項目ごとに出現数が列挙されている。

### (5) 論評：

(i) 文型の出現頻度は百分率で示されているが、統計的有意差の検討はされていない。

(ii) 修辞法に関しては、多くの項目が設定されているが、多様な性質のものが混在しているように思われる。たとえば、inversion, parenthesis, apposition などは、統語的な現象とみることもできよう。

(iii) 不完全ながらも、文型に焦点をあてたということ、また、取り扱いにくい修辞法に言及した点は評価される。

## 3. 集合文体

### 3.1. Antosch (1969)

#### (1) 目的：

集合文体間の特徴のちがいを調べる。

#### (2) 資料：

種々の集合文体の、それぞれ、500から700シラブル（ドイツ語）。

#### (3) 方法：

A. Buseman の actionquotient をもとに、VAR (verb-adjective ratio) を設定し、それにしたがって、集合文体、その他の特徴を調べる。

$$\text{VAR} = \frac{\text{動詞数}}{\text{形容詞数}}$$

#### (4) 結果：

(i) VAR : drama > nondrama

VAR が大というのは、形容詞よりも、動詞が多用されているということである。したがって、drama は、動詞表現が形容詞表現より相対的に多いといえる。

(ii) VAR : dialogue > monologue > narration

(ii)からは、対話を含む表現の方が、記述的な表現より VAR が大きいということ、つまり、より多くの動詞表現を含んでいることがわかる。

(iii) VAR : narrations of personal sorts > theoretical works of factual kind

(iv) VAR : fairy tale > novels, stories > scientific works

(iii)(iv)は、個人的な文体の方が、客観的なものより、VAR が大きいことを示している。

(5) 論 評：

(i) 動詞と形容詞の出現頻度の比較は、以前から文体研究の重要な一面であるが、動詞、形容詞それぞれの下位区分や、統計的な処理が、今後必要となろう。また、他の品詞、たとえば、名詞、副詞等についても同様の調査が可能であろう。

(ii) この論文の中には、文体ではなく、作品中の登場人物の性格や、登場人物の感情的状態と VAR の関係を論じた部分があるが、この点は、後続の二つの調査との関連で興味深い。

### 3.2. Osgood (1960)

(1) 目 的：

強い刺激、衝動が言語表現にどのような影響を与えるかを調査する。

(2) 資 料：

精神的に異状な状態にあると考えられる自殺者の遺書と、自殺の意図のない人に書かせた「遺書」とを対象とする。前者の数は、男女あわせて、69、後者は、同じく、72である。一件の長さは、100語以上である。

(3) 方 法：

自殺者の遺書は、精神的に異状な状態で書かれているために、柔軟性のない (stereotyped) 表現が多くなっているはずという前提に立って、種々の項目について調査が行われている。調査項目は、大区分で4、小区分で16が設定されている。

(4) 結 果：

結論として、前述の前提は妥当なものと認定される。二つの資料の間で、有意差を示した項目は以下のものである。(i) type/token ratio. (ii) くり返し表現. (iii) N-V/Adj-Adv ratio. (iv) Cloze 値. (v) allness 語の頻度. (vi) mands 表現の頻度. (vii) 動詞句の修飾表現の出現頻度. (viii) 構造上異常な表現.

(5) 論 評：

(i) 集合文体というのは、ふつうは、ジャンル別の文体を指すのであるが、このセクションでは、それとは異った、また、交差するレベルで、つまり、書き手の精神状態との関連で、調査が行われている。これは、次のセクションの調査と相まって、集合文体という概念の精密化につ

ながら調査であるといえる。

(ii) 調査項目のうち、N-V/Adj-Adv ratioは、前述の VAR を拡大したもので、VAR の内包する問題点は継承しているものの、興味深い項目である。

3.3. Sandell (1977)

(1) 目的：

説得性 (persuasion) と集合文体との関連を調べる。

(2) 資 料：

広告文、新聞の家庭欄、外国ニュース、それぞれ、1958年と1968年のもの（スウェーデン語）。

(3) 方 法：

広告文は、説得性が高く、外国ニュースはそれが低いという前提に立って、調査を行なう。調査項目は、品詞の出現頻度、強意語の出現頻度、省略の出現頻度、文、節、語の長さ、類韻の出現頻度などである。

(4) 結 果：

調査結果は次のようにまとめられる。あげられている項目は、有意差を示したもののみである。上のもの程有意差が大きい。

項 目	広 告 文	家 庭 欄	ニ ュ ー ス
節 の 長 さ		<	<
*品 詞		<	<
強 意 語		>	
省 略		>	>
語 頭 の 類 韻		>	
語 の 長 さ		<	<
形 容 詞		>	>
文 の 長 さ		<	<

(\*この「品詞」は、名詞、動詞、形容詞、副詞以外のものを指す)

形容詞を除いて、主な品詞、たとえば、名詞、動詞、副詞は、有意差を示さなかった。とくに、動詞は、どの資料においても有意差は認められない。また、1958年の資料と、1968年のそれとの間においても、一、二の項目を除いて有意差は認められない。

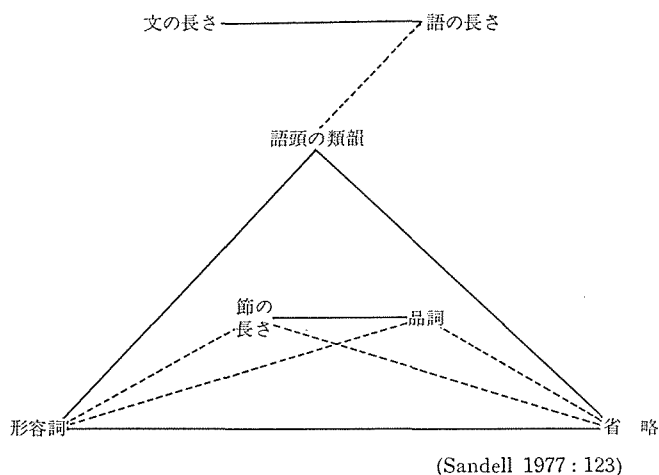
つぎに、項目間の相関と逆相関は次図のようになる。実線は相関を、点線は逆相関を示す。

(5) 論 評：

(i) 説得性という点に焦点を決めて、集合文体の比較を行っている。このような主観的要因と客観的な言語事実との対照は、文体研究上重要なもので、さらに広範な調査が必要とされよう。

(ii) 調査項目は、主に語彙的なもの、書記的なものを中心となっており、不満が残る。構造的なもの、また、構造の複雑さを示すようなものについても検討されるべきであろう。

(iii) 調査項目を個々別々に列挙するのではなく、その間の相関関係を出しているが、これは、今後の文体研究の望ましい方向を示しているものと考えられる。



#### 4. 特定言語の文体

これまで、個人文体、集合文体についての調査をみてきたのであるが、この延長線上に、特定言語の文体というものが考えられる。これは、言語類型論とも密接に関係する分野であるが、現在の時点では、筆者の知る限り、統計的に信頼できる処理を行った調査は見られない。このレベルでの研究は、前二者の文体を含み、さらに広範な調査を前提とするものであるので、地道な調査の積み重ねを待たねばならない。

つぎに、このレベルに入ることになると思われる一例をあげておく。

##### 4.1. Herdan (1966)

###### (1) 目的：

三つの言語における文字の出現頻度を比較する。

###### (2) 資料：

ドイツ語、英語、フランス語の単語。対象となった単語数については言及なし。

###### (3) 方法：

単語中に出現する文字の頻度を調べる。

###### (4) 結果：

(i) 出現頻度の大きい14文字で、すべての文字の生起の84%~94%を占める。

(ii) 三つの言語において、最多頻度を示すのは文字 *e* である。

(iii) 英語とフランス語において、上位4文字は、2, 3位の順位は逆になるものもあるが、共通して、*e, t, a, i* である。

###### (5) 論評：

ごく初歩的な調査といわざるをえないが、それぞれの言語の文字の出現頻度について、一つの傾向を明らかにしている。

## 5. 結 論

これまで、文体の数量的・統計的研究について検討を加えてきたのであるが、いくつかの重要な点が明らかになった。

まず第一に、数量的処理と統計的処理とは同一ではないということである。前者の方は、とにかく、数字を含む形で記述が行われていればよいのであるが、後者の場合は、しかるべき手順を踏んで出された数字のみを検討の対象とする。その手順のうち重要なものは、つぎの二つであろう。

(i) 母集団に対する標本の量の妥当性

(iii) 有意差の有無の検定

対象となる資料のすべてを分析するのではなく、その一部を、全体を代表するものとみなして、分析・調査することが多い。この際、その標本の大きさの妥当性が統計的に保障されていなければならない。

また、調査の結果、何らかの差が出た場合、その差が、統計的に有意差をなしているかどうか、検定が必要である。多くの文体研究では、この手順が省略されて、出てきた数字について主観的に判定を下していることがよくある。

第二に、本稿では、文体を三つのレベル、つまり、個人文体、集合文体、特定言語の文体、に区分したのであるが、具体的な調査を検討した結果、これまでの区分けと交差するような形で、書き手、話し手の心理状態、意図などを扱う分野を考える必要のあることがわかった。

第三に、実例を検討した結果、資料に対する主観的印象と、その客観的特徴との照合が、将来の文体研究にとって、不可欠のものであらうという結論に達した。

第四に、調査項目は、資料の全体像が見えるように設定する必要があるが、一般的にいて、構造的なものがなおざりにされてきているように思える。その点、Hayes (1969) は、特筆すべき調査であるといえる。「変形」という概念は、生成変形文法の進展につれて、その形を変え、また、その重要性も変動しているのであるが、文体研究のように、具体的な資料を分析する場合には、複雑な発話を単純化する役割をもっており、無視できないものである。

最後に、調査項目として種々雑多のものが設定できるのであるが、それぞれの項目間の相関関係を調べることによって、いくつかの項目を、一つのグループにまとめるという操作が可能ならずである。その結果、単なる項目の列挙ではなく、項目間の有機的な関係が明らかになるように思われる。Sandell (1977) には、これに近い試みが、断片的にはあるが、みられる。また、日本語に関するものでは、安本 (1965) に、この面での、示唆に富む、精度の高い研究がある。もっとも、安本 (1965) では、構造的な調査項目が少ないという欠点があり、この点は残念である。しかし、とにかく、項目を、有機的な関係なしに、列挙したのでは、文体の特徴を統一的に把握できないというのは事実であり、この線にそっての研究が、英語に対しても行われる必要があらう。(昭和58年9月13日)

## Bibliography

- Antosch, F. (1969): "The diagnosis of literary style with the verb-adjective ratio": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Bennett, P. (1969): "The statistical measurement of a stylistic trait in *Julius Caesar* and *As You Like It*": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Burwick, F. L. (1969): "Stylistic continuity and change in the prose of Thomas Carlyle": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Chomsky, N. (1957): *Syntactic Structures*: Mouton.
- Cook, W. A. S. J. (1979): *Case Grammar: Development of the Matrix Model* (1970–1978): Georgetown U.P.
- Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969): *Statistics and Style*: Elsevier.
- Hayes, C. W. (1969): "A study in prose styles: Edward Gibbon and Ernest Hemingway": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Herdan, G. (1966): *The Advanced Theory of Language as Choice and Chance*: Springer-Verlag.
- Kroeber, K. (1969): "Perils of quantification: The exemplary case of Jane Austen's *Emma*": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Landon, G. M. (1969): "The quantification of metaphoric language in the verse of Wilfred Owen": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Leech, G. N. & M. H. Short (1981): *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*: Longman.
- Lees, R. B. (1960): *The Grammar of English Nominalizations*: Mouton.
- Osgood, C. E. (1960): "Some effects of motivation on style encoding": Sebeok, T. A. (ed.) (1960).
- Sandell, R. (1977): *Linguistic Style and Persuasion*: Academic Press.
- Sebeok, T. A. (ed.) (1960): *Style in Language*: MIT.
- Williams, C. B. (1969): "A note on the statistical analysis of sentence-length as a criterion of literary style": Doležel, L. & R. W. Bailey (eds.) (1969).
- Yasumoto, B. (1965): *Bunsho Shinrigaku Nyumon*: Seishin Shobo.